

[課題演習概要]

よりよい人間関係を形成する学級活動(2)の研究
—社会的スキルに着目して—

大山 悟 史
Satoshi OYAMA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：学級活動(2)，よりよい人間関係，ソーシャル・スキル・トレーニング

1 研究の目的

(1) 主題の意味

よりよい人間関係を形成するとは、学校内外での生活に関わらず、互いを尊重し合える良好な関係を自主的、実践的に築いていくことである。よりよい人間関係を形成する学級活動(2)とは、自己の生活課題の解決方法を意思決定して実践する活動であり、特別活動の学級活動「(2) 日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」の内容である「イ よりよい人間関係の形成」(以下、学活(2)-イ)で、良好な関係を自主的、実践的に形成しようとする児童を育成するものである。

(2) 副主題の意味

社会的スキルとは、人が対人場面において自らの目的を効果的に達成するために相手に適切に反応しようとして用いる言語的、非言語的な対人行動のことをいう。具体的には、相手に嫌な気持ちを抱かせない言葉や笑顔で対応するなどの行動である。社会的スキルの定義は、対人場面で用いられる認知、感情、行動からなる一連の過程として定義する。このような「過程」を相川(1993)は社会的スキルの生起過程モデル(以下、モデル)として提唱している(図1)。

本モデルでは、社会的スキルは「相手の反応の解読(相手の気持ちを理解する)」または「対人目標の決定(相手に対してどのように行動すべきか決定する)」から始まり「対人反応の決定(相手に対する具体的な言動の意思決定)」や「感情の統制(相手にも自分にも快の感情が生まれるようにする)」を経て、言語的、非言語的な「対人反応の実行(意思決定した言動を実践する)」に至ると考える。このモデルを参考に、学活(2)-イの授業を構成し、児童一人一人によりよい人間関係を形成する資

質・能力の育成を目指すものである。

(3) 研究の目的

本研究では、社会的スキルを身に付けるための活動を取り入れた学活(2)-イの授業実践を通して、子供のよりよい人間関係が形成されることを目的とする。

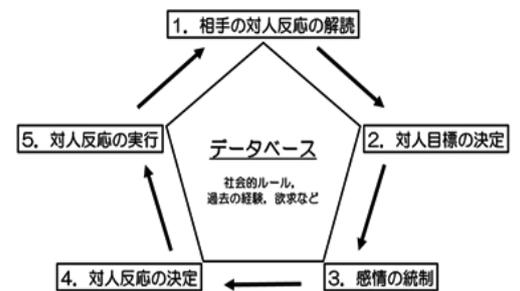


図1 社会的スキルの生起過程モデル(相川 1993, 一部変更)

2 研究の計画

2年次では、学活(2)-イの内容の中でも感謝について着目した実践を行った。しかし、子供のよりよい人間関係の形成には感謝についてだけではなく、他の内容も必要であると考えた。よって、3年次では、前期に感謝についての内容、さらに後期に学級の実態に合わせた内容の授業実践を行い、子供のよりよい人間関係の形成を目指す。

3 研究の内容

(1) 研究の効果の検証

本研究の成果は、学校環境適応感尺度(ASSESS)を用いて前後期の授業前、授業後の子供の変化を見取っていく。次に、社会的スキルに関して、渡辺(1996)のソーシャル・スキル・トレーニング(以下、SST)の技法を参考にモデリング、行動リハーサルを入れて、子供たちの社会的スキルの向上を目指す。

(2) 授業実践

表1に示すように前期は「友達に対する感謝」を題材に友達への感謝の気持ちの伝え方を学習し

た。モデルとの関連は、つかむ段階で感謝の気持ちを伝えることができていないという課題をつかみ、さぐる段階でその原因を追求し、見つける段階で感謝の気持ちの伝え方を見付け、決める段階で自分に合った伝え方を意思決定した。後期は「自分の気持ちの伝え方」を題材に友達との話し合いで自分の気持ちの伝え方について学習した。モデルとの関連は、つかむ・さぐる段階で互いの気持ちが伝わらず、トラブルになっている課題と原因を把握し、見つける段階で気持ちの伝わる方法を見付け、決める段階で自分に合った伝え方を意思決定した。

表 1 「友達に対する感謝」「自分の気持ちの伝え方」の授業実践概要とモデルとの関連

	前期授業概要	後期授業概要
題材名	友達に対する感謝	自分の気持ちの伝え方
日付	2021年6月23日(水)	2021年12月8日(水)
対象	北九州市立F小学校 第5学年1組28名	
本題材	・SSTや友達の見方から感謝を伝えるときに気を付けることを理解できる【知識・技能】	・SSTや友達との話し合いから自分の気持ちを伝える方法を知り、身に付けることができる【知識・技能】
育成する資質・能力	・SSTや友達の見方から自分なりの感謝の伝え方を意思決定できる【思考力・判断力・表現力等】 ・積極的に自分の感謝の気持ちを伝えようとする【学びに向かう力、人間性等】	・SSTや友達の見方から自分ができる相手に嫌な思いをさせない伝え方を意思決定できる【思考力・判断力・表現力等】 ・相手に嫌な思いをさせない方法で進んで自分の気持ちを伝えようとする【学びに向かう力、人間性等】
社会的スキル生起型モデルとの関連		
つかむ	・友達に対して感謝の気持ちを持っているが、なかなか感謝の気持ちを伝えることができていないことをつかむ	・相手かどのようなことを考えているのか理解しようとする相手の対人反応の解釈 ・相手にに対してどう行動するか目標設定(対人目標の決定)
さぐる	・なぜ感謝の気持ちを伝えられないのか原因をさぐる例 はずかしい相手に聞こえていないイライラしている	・できないときの原因 具体的な場面から、自分の感情が相手にどう伝わっているのか考える(感情の解釈)
見付ける	・教師のポイントを提示し、ポイントを解説する(ニコニコビーム作戦、ビューティフルボイス作戦、サンキューレター作戦) ・友達モデリングを見たり、実際にリハーサルしたりしながら、自分に合った感謝の伝え方を話し合っで見付ける	・自分の気持ちを伝えることができたり、良い気持ちになったりする作戦を見付ける(対人反応の決定、対人反応の実行)
決める	・見付ける段階で話し合った内容をもとに自分に合った感謝の伝え方を意思決定する	・自分自身かどのように行動していくのか意思決定し、今後の活動につなげる(対人反応の決定、対人反応の実行)

(3) 考察

題材「友達に対する感謝」の学習では、2 学期に行われた自然教室後では感謝の気持ちを手紙で伝えたりゲストティーチャーの授業では感謝の気持ちを振り返りに書いたりしていたと担任から聞いた。このことから、2 学期になっても学習したことを実践に活かそうとしたことが分かる。題材「自分の気持ちの伝え方」では、(表 2)に示すよう

に、A 児は、自分が意思決定した作戦を実践し、ケンカが少なくなったという体験からこれからも継続していこうと意思決定したことが分かる。B 児は、友達が作戦を実践してくれたことで、以前よりも仲良くなったと述べている。このようなことから、子供たちは授業実施前と比べて、よりよい人間関係を形成することができていると考える。

表 2 事後活動での子供の振り返り

子供	1 週間の振り返り
A 児	前はすぐに怒りそうになってたけど、素直にあやまる作戦と理由を聞く作戦で言われる相手のことを考えて「やさしく」を意識して行動できてケンカが少なくなったからこれからも続けたい。
B 児	帰りのとき〇〇さんに何も言わずトイレに行っちゃって〇〇さんを待たせてしまって怒ってしまうかと思ったけど〇〇さんが理由をちゃんと聞いてくれたので、仲良く帰ることができました。理由をちゃんと聞いてくれたときは安心しました。前よりよくしゃべるようになりました。

4 成果と課題 (○成果, ●課題)

- ASSESS の結果(表 3)から、教師サポート以外の数値が前期より上がっていることが分かる。ASSESS は 40 未満の数値が要支援領域とされるので、4 回目の教師サポートの数値 71 が問題のある結果だとは考えにくい。また、社会的スキルを身に付ける実践を行ってきたことで、友人サポートなどの人間関係の数値はもちろんのこと、生活満足感つまり子供の生活全体の満足感を示す数値が 1 回目の 61 から 4 回目は 63 と上がっていることから、よりよい人間関係が形成された学級生活に満足していることが分かる。
- 今回の実践では、子供たちが社会的スキルを用いて生活している姿が見られたが、長期的な視点で検証することが難しかったため、今後は子供たちの長期的な人間関係の変容を見取ってきたい。

表 3 授業実施前後の ASSESS の結果

	生活満足感	教師サポート	友人サポート	向社会的スキル	非暴力的関係	学習的適応
1 回目	61	73	59	59	66	53
2 回目	59	74	62	60	64	53
3 回目	58	69	61	60	66	53
4 回目	63	71	64	60	66	54

主な引用・参考文献

相川充 1996 『社会的スキルと対人関係』
 栗原慎二・井上弥編書 2013 『アセスの使い方・活かし方』
 文部科学省 2017 『小学校学習指導要領解説特別活動編』
 渡辺弥生 1996 『ソーシャル・スキル・トレーニング』